

## 縄文時代の打欠石錘の用途に関する一考察

山 本 直 人

### はじめに

縄文時代の石器で、扁平な楕円礫の長軸あるいは短軸の両端に打ち欠き痕のある石錘は、研究者によって礫石錘とも打欠石錘ともよばれている。筆者は礫石錘よりも打欠石錘の方が製作技術的に妥当な名称であると考えているので、本稿では打欠石錘の用語をもちいている。この石錘の用途については二つの説があり、一つは漁網錘とする説で、もう一つは編み台と錘具を使用するもじり編みの錘具、すなわち編物石とする説である。漁網錘説の立場をとる研究者の論考では十分な根拠をしめして具体的な網漁法を提示したものはなく、慣例的にとなえられている漁網錘説を踏襲しているだけの段階にとどまっている。一方、編物石説をとる研究者にしても、大量に出土する遺跡においてもそれらが編物石であると抗弁するだけで、なぜ大量に出土するのか、納得のいく解釈をしめしているわけではない。漁網錘あるいは編物石のどちらの説を採用するかで復元される縄文時代像が大きくかわってくるので、打欠石錘の用途を特定することは重要な課題となっている。

こうした状況をふまえ、本稿は縄文時代の打欠石錘の用途は何になる可能性が高いのか、ということを検討することを目的としたものである。筆者は石川県南部に位置する手取川扇状地の縄文時代後晩期社会の基本的性格の解明をめざしており、こうした研究の一環として打欠石錘の用途の研究をすすめているので、石川県を研究対象としている。

研究の方法については民俗考古学的手法を採用し、重量に着目して論をすすめていく。

漁網錘では、現代から縄文時代にさかのぼる形で、物質文化史的に記述をすすめる。最初に漁網錘・漁労錘の民具資料を報告し、つぎに1912年と1913年に刊行された『石川県湖潟内鬱水面利用調査報告』に記載されている漁網錘を列举していく。さらに中世から弥生時代にみられる管状土錘の重量をあきらかにし、最後に漁網錘の用途が確実であると考えられている縄文時代の土器片錘、切目石錘、有溝石錘の重量を確認する。上記の作業をすすめたうえで漁網錘の重量と打欠石錘の重量を比較し、打欠石錘のなかで漁網錘になる可能性のあるものを指摘する。

編物石では、筆者は十分な民俗調査をすすめていないので、渡辺誠氏の民俗学的研究の成果を援用して民具資料の編物石の重量と打欠石錘の重量を比較し、打欠石錘のなかで編物石になる可能性のあるものを指摘する。

## 1. 漁網錘・漁撈錘の民具資料

石製の漁網錘や漁撈錘に留意して民具資料をあつめてきたが、石川県内ではあまり資料がのこっておらず、収集できたデータはごくわずかである。

### (1) 輪島市立民俗資料館に展示されている民具資料

1989年11月11日と同年11月25日の2日間、石川県輪島市町野町南時国に所在する輪島市立民俗資料館で聞きとり調査をおこなった。1994年8月25日には補足調査を実施した。

#### ①石錘をつかっている返し網

写真1の1の右側は自然石を漁網錘としてつかっている返し網である。返し網というのは刺し網の一種で、磯の浅い所の岩場でつかい、ハチメ、イソバエ、チヌ、クロダイをとる。石錘を細いワラ縄でつつみこんで、刺し網の下端にしばりつけてある。網に魚がはいると、漁網錘の下のモサモサしたワラがひっくりかえって網にからみつき、魚がのがれられないようになる。全長は150cm、浮子から石錘までは120cm、編み目の大きさは3cm×3cmである。

石錘は全部で32個つかわれており、直径3cmあまりの丸味をおびた楕円礫が多いが、一部不整形のものもみられる(写真1の2・3)。測定可能な10点について重さを計測したところ、10g, 13g, 15g, 15g, 15g, 17g, 17g, 20g, 22g, 23gで、10gから23gの範囲に分布し、平均は16.7gである。石質としては、凝灰岩、安山岩、黒色頁岩などがみられる。

#### ②管状土錘・石錘をつかっている返し網

写真1の1の左側は管状土錘22個と石錘3個をつかっている返し網である。編み目の大きさは3cm×3cmである。

管状土錘の重量は大体15~20gに分布し、長さは3.2~3.7cmで、3.5~3.7cmに集中している(写真1の4)。幅は2.5cm前後、孔径は1.2cm前後である。装着方法はワラ束を管状土錘の孔に逆U字状にとおして土錘の下端でしばり、ワラ束を別のワラ束で網にむすびつけている。

#### ③壁にかけてある投網

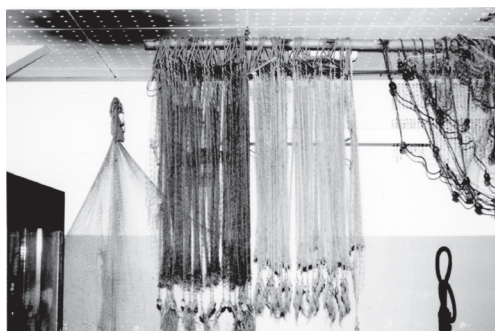
漁網錘は鉛製で、直径1.8cm前後の丸味をおびた算盤形である(写真1の5)。6cmおきに100個ぐらいつけられており、はずれないように鉛錘の上端と下端がきつくしばられている。曾々木大川でつかわれていた。

#### ④台の上にひろげてあるアゴ網

アゴというのはトビウオのことである。釉葉のかかった管状土錘で、大体の大きさは重さ80g、長さ4.5cm、幅4.0cm、孔径1.7cmである(写真1の6)。網裾の縄に管状土錘をとおして着装している。

#### ⑤竿につけてあるアゴ網

竿につけてあるアゴ網は3種類の土錘がつかわれており、一つは長さが3.5cmの横長のもの、二つ目は長さが4.0cmで釉葉がかけられたもの、三つ目は長さが5.0cmのものである。



1 石鍾・管状土鍾をつかっている返し網



2 返し網の石鍾



3 返し網の石鍾



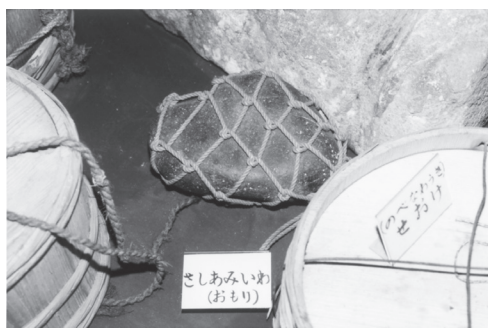
4 返し網の管状土鍾



5 投網の鉛鍾



6 アゴ網の管状土鍾



7 刺し網いわ



8 仁江漁港の石鍾

写真1 輪島市立歴史民俗資料館に展示されている民具資料ほか

#### ⑥台の上の刺し網いわ

刺し網漁の時、潮流で網がながされないようにするための石鍾である（写真1の7）。重さ不明、長さ23cm、幅15cm、厚さ8cmくらいである。黒色。

#### （2）珠洲市仁江漁港の石鍾

1989年8月19・20日、珠洲市仁江町の角花菊太郎さん宅で揚げ浜式塩田製塩法を見学する石川考古学研究会例会が開催された。その例会に参加し、角花家の横にある仁江漁港でみかけた石鍾である（写真1の8）。多分、刺し網が潮でながされないようにするための石鍾であろう。人頭大の石がつかわれている。詳細な大きさは計測しなかったため不明である。

#### （3）石川県立歴史博物館に展示されている石鍾

調査日は1996年3月16日である。

##### ①タラ縄用沈子

2点展示されている。1点は細長い楕円磔で、長さ15.8cm、幅9.3cm、厚さ7.0cm、重さ1425gである。もう1点は三角柱状のやや角ばった円磔で、長さ11.6cm、幅10.0cm、厚さ6.1cm、重さ1008gである。

##### ②ガンド流し釣り用鍾

1点のみである。やや角ばった円磔で、長さ17.5cm、幅11.5cm、厚さ8.8cm、重さ2700gである。

## 2. 『石川県湖潟内彎水面利用調査報告』に記述されている漁網鍾

鳳至郡能都町宇出津にあった石川県水産試験場が全4巻の調査報告を刊行している。第1巻は小松市の今江潟と木場潟（石川県水産試験場 1912a）、第2巻は羽咋市邑知潟（石川県水産試験場 1912b）、第3巻は加賀市柴山潟（石川県水産試験場 1913a）、第4巻は金沢市から内灘町、津幡町、宇ノ気町にまたがる河北潟（石川県水産試験場 1913b）の調査報告である。

#### （1）今江潟・木場潟

##### ①フナ投網

漁網鍾である沈子は鉛製で、1個の重量は7匁5分（28.125g）、総数は140～150個である。漁網鍾の総重量は3937.5～4218.75gとなる。

##### ②ボラ投網

沈子は鉛製で、1個の重量は7匁（26.25g）ないしは8匁5分（31.875g）、総数は116個である。漁網鍾の総重量は3045.0～3697.5gとなる。

#### （2）邑知潟

##### ①ボラ刺網

沈子は径1寸（3.0cm）あまりの小石をワラにつつま、浮子の直下の網裾につける。



## ②投 網

沈子は鉛製で、総数170個、1個の重量7匁（26.25g）あまりである。漁網錘の総重量は4462.5gである。漁獲物はフナ、コイ、ボラ、アカメボラである。

## ③巻 網

魚取部の袋網の裾には、長さ1寸5分（4.5cm）、径3分（0.9cm）の鉛製の沈子を2寸5分間隔につける。主な漁獲物はウナギ、スズキ、ナマズ、カワギスである。

## （3）柴 山 潟

### ①伏 漬

「フシ」または「ツケ」とよばれており、サクラヤクワなどの枝を潟底に樹立しておき、冬季に四面を伏網でかこみ、枝をとりぞき、投網で捕獲する漁法である。沈子は円筒形の土錘をもちい、周囲1寸5分（4.5cm）、長さ1寸（3.0cm）のものを網1反に80個つける。

## （4）河 北 潟

### ①根ぼえのボラ網

根ぼえは八田村でおこなわれた漬漁業で、漬2束を1組として400組つかう。漁獲物はボラを第一とし、フナ、ウナギ、エビなどである。

ボラ網の沈子は陶器製で、1個の重量は2匁（7.5g）である。175個つかい、漁網錘の総重量は1312.5gである。

### ②根ぼえのフナ網

フナ網の沈子は陶器製である。1個の重量は2匁（7.5g）で、225個もちいる。漁網錘の総重量は1687.5gである。

### ③アマサギ刺網

沈子は陶器製で、1個の重量は5匁（18.75g）、90個もちいる。総重量は1687.5gである。

### ④ハゼ刺網

沈子は陶器製で、1個の重量は6匁（22.5g）、15個もちいる。総重量は337.5gである。

### ⑤ボラ巻網

沈子は陶器製で、1個の重量は1匁（3.75g）、180個もちいる。総重量は675.0gである。

### ⑥立 袋 網

沈子は陶器製で、1個の重量は20匁（75.0g）、50個もちいる。漁網錘の総重量は3750.0gである。ハゼ、サヨリ、ウナギを捕獲する。

### ⑦ソメゴリ網

白魚をとる網で、沈子は鉛製である。1個の重量は4匁（15.0g）、60個もちいる。漁網錘の総重量は900.0gである。

### 3. 中世～弥生時代の漁網錘

拙稿をもとに検討をくわえていく(山本 1986)。漁網錘のほとんどは管状土錘で、1986年3月時点で筆者が確認した管状土錘は63遺跡660点である。石川県内の遺跡の報告書では管状土錘の出土点数が正確に報告されていないものもあり、これらについては図版に掲載されている点数を出土点数とし、報告されている遺跡でも実見して点数の増加が確認できた場合は確認後の点数としている。

#### (1) 管状土錘の形態分類

管状土錘は文字どおり管状や円筒状を呈する土製の漁網錘で、窯でやかれた須恵質の管状陶錘もあり、本稿ではこれらもふくめている(図3～5・7、図6の1～13・16～19)。形態的特徴によってI類～IV類の4者に大別され、さらにI類とⅢ類はa～dに、Ⅱ類とⅣ類はa・bに細分される。全体として管状土錘は12類に分類することができる(図1)。






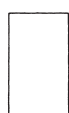


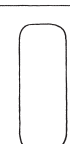
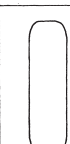


	a	b	c	d
I				
II				
III				
IV				

図1 管状土錘形態分類図

I類は紡錘形を呈するものである。

Ia類：長さとはほぼ等しいもの。

Ib類：長さが幅の2倍より短いもの。

Ic類：長さが幅の3倍より短いもの。

Id類：長さが幅の3倍以上のもの。

Ⅱ類は円筒形を呈し、断面形態が正方形・長方形を呈するものである。

IIa類：長さとはほぼ等しいもの。

IIb類：長さが幅の2倍より短いもの。

Ⅲ類は円筒形を呈し、断面形態が隅丸方形・隅丸長方形を呈するものである。

IIIa類：長さとはほぼ等しいもの。

IIIb類：長さが幅の2倍より短いもの。

IIIc類：長さが幅の3倍より短いもの。

IIId類：長さが幅の3倍以上のもの。

Ⅳ類は球状を呈するものである。

IVa類：長さとはほぼ等しく、平面形態が円形を呈するもの。

IVb類：長さが幅の2倍より短く、平面形態が楕円形を呈するもの。

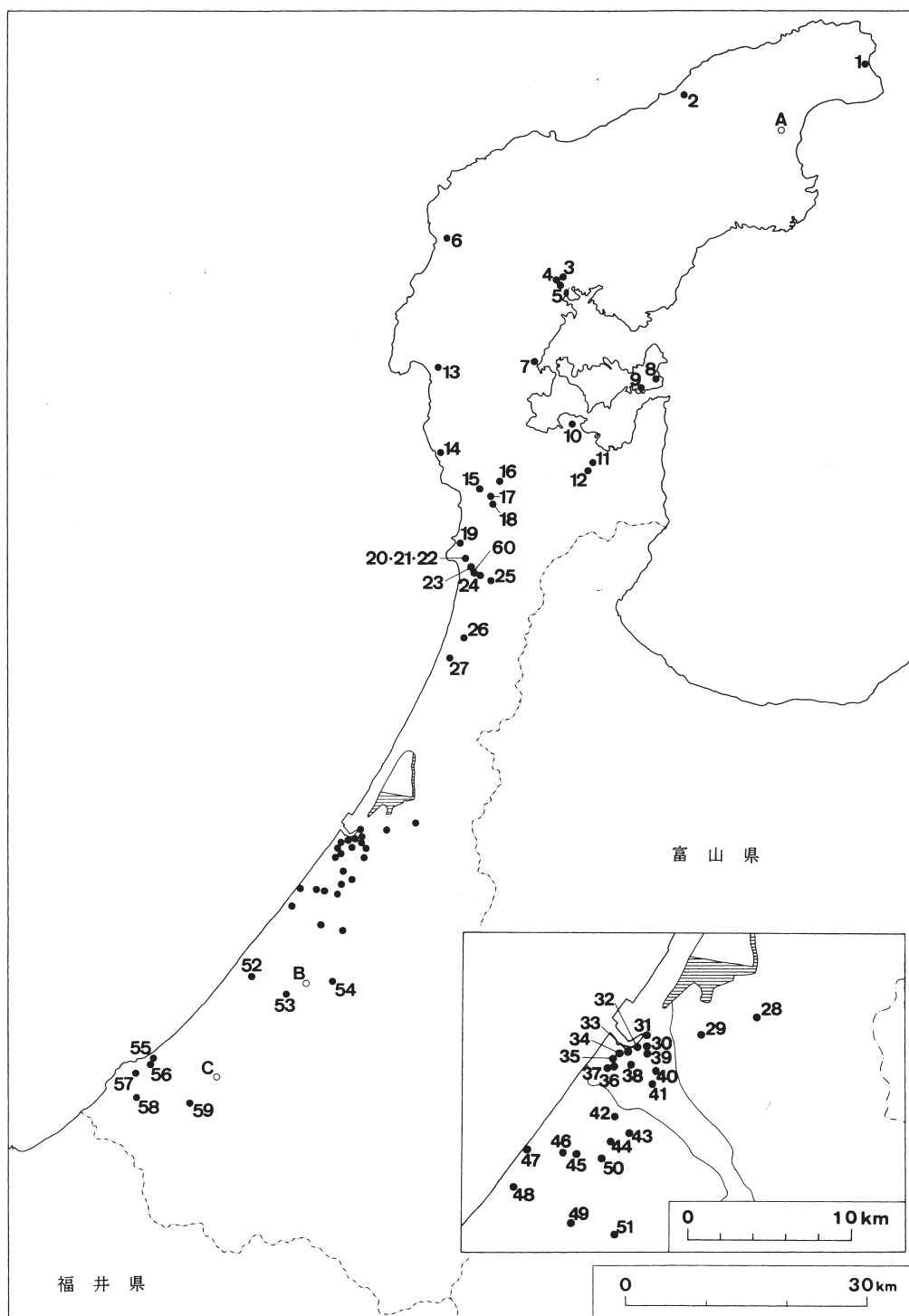


図2 管状土錘出土遺跡分布図

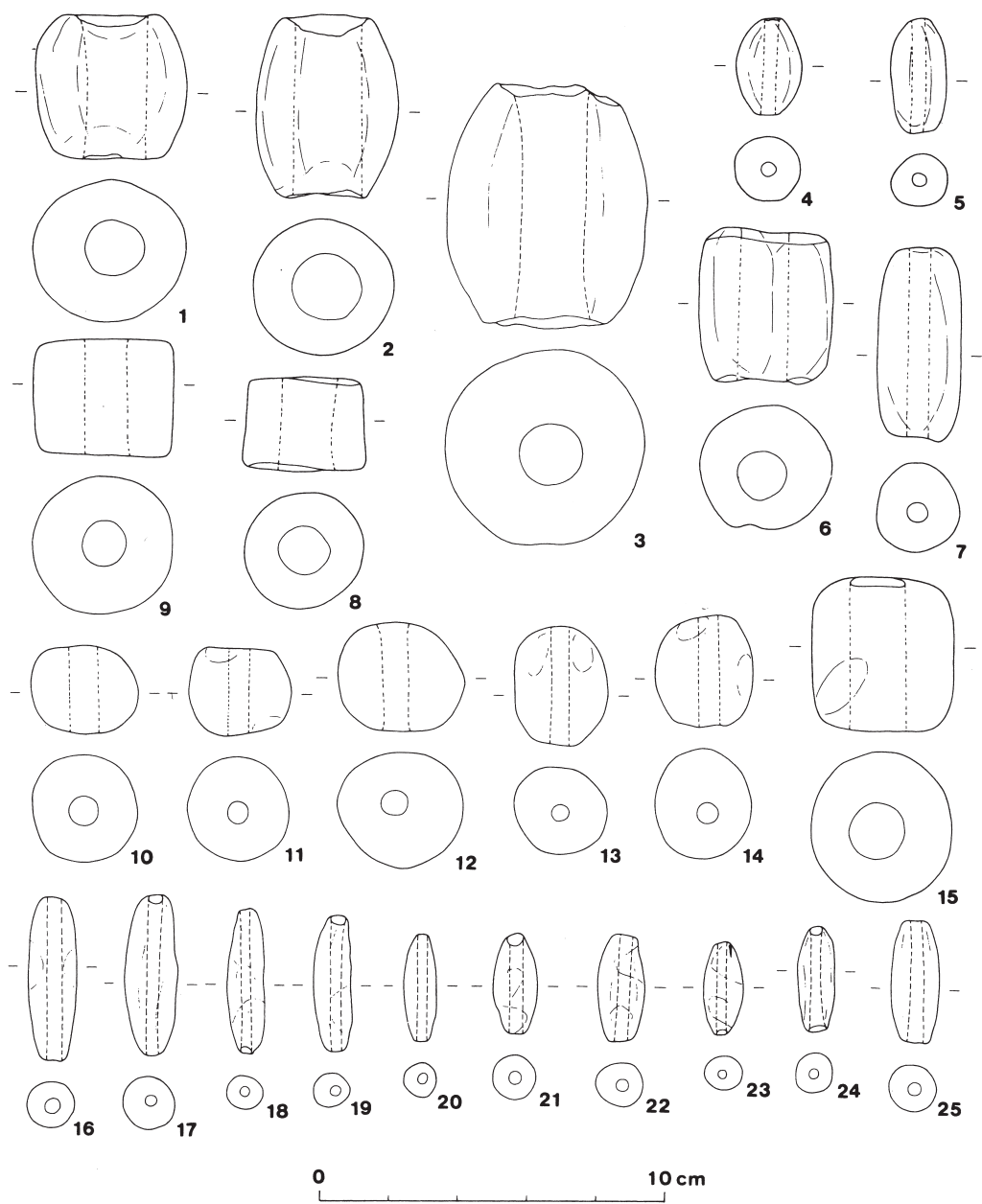


図3 管状土錘実測図1 (1~8: 道下元町遺跡、9~15: 奥原遺跡、16~25: 米浜遺跡、縮尺1:2)



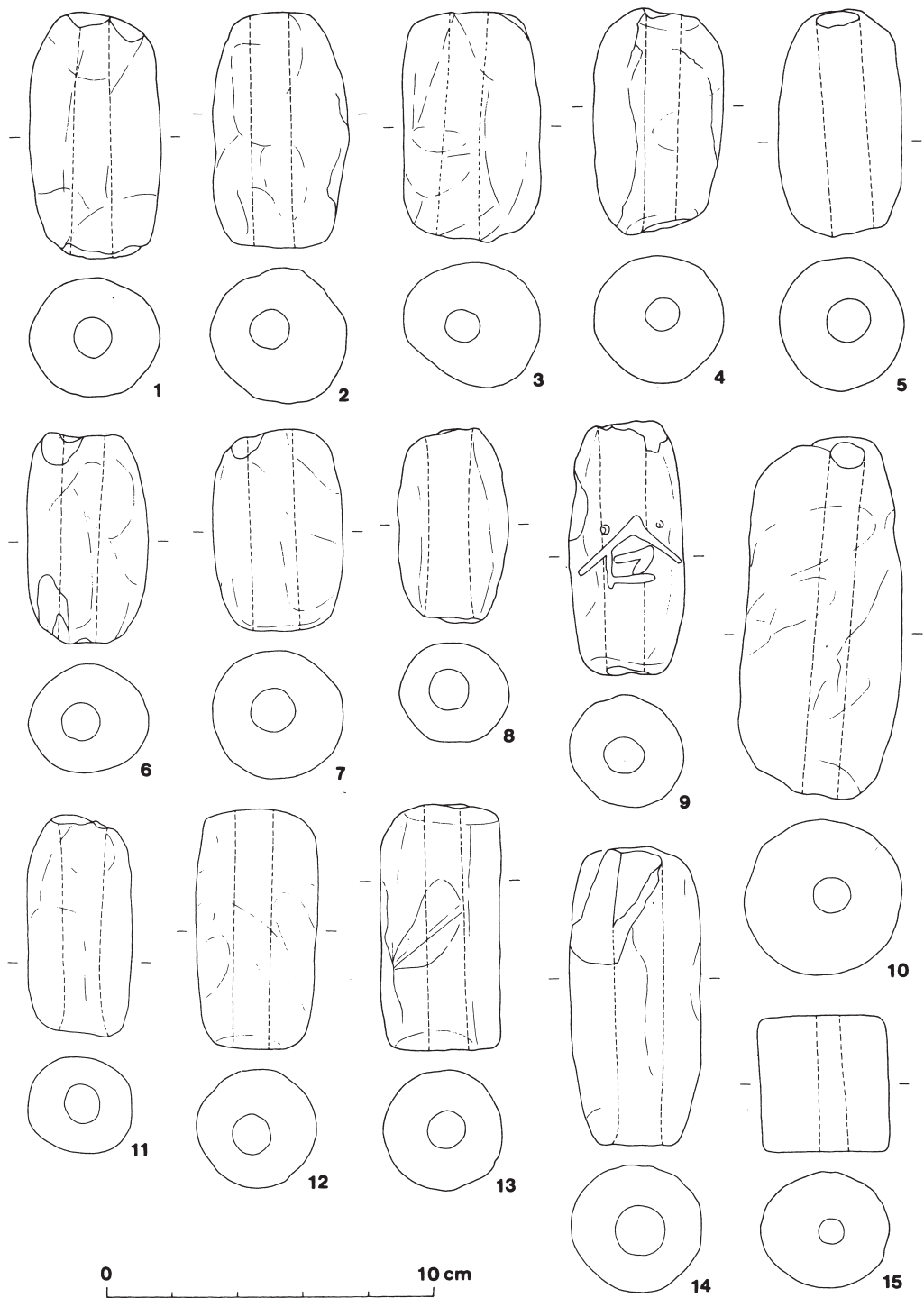


図4 管状土錘実測図2 (米浜遺跡、縮尺1:2)

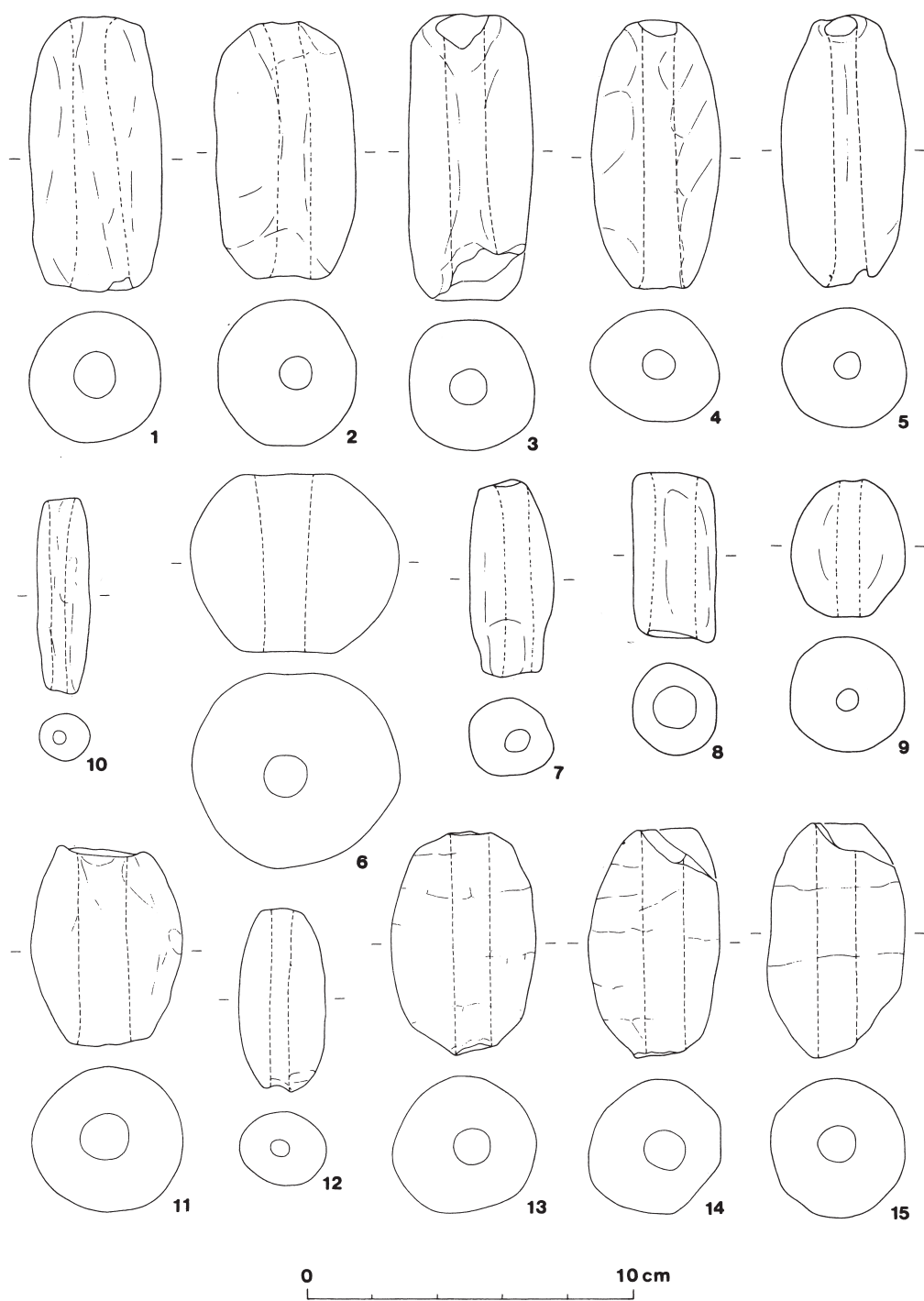


図5 管状土錘実測図3 (1~5: 上田出西山遺跡、6: 寺家チョウエイジ遺跡、7~9: 寺家オオバタケ遺跡、10~12: 深江遺跡、13~15: 勅使遺跡、縮尺1: 2)

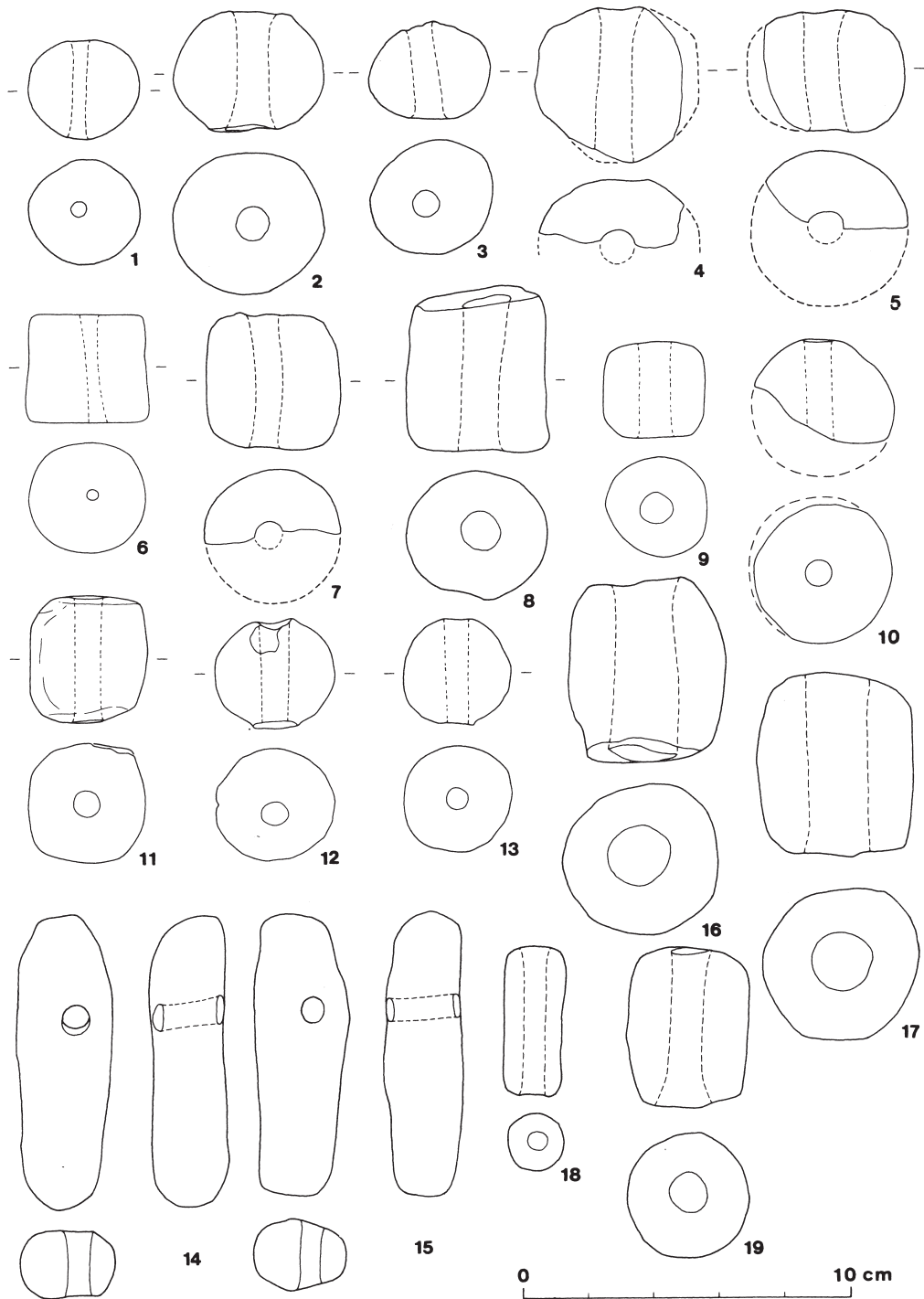


図6 管状土錘実測図4 (1～10: 近岡遺跡、11～13: 敷地町後方遺跡、14～19: 法住寺3号窯跡、ただし14・15は棒状陶錘、縮尺1:2)

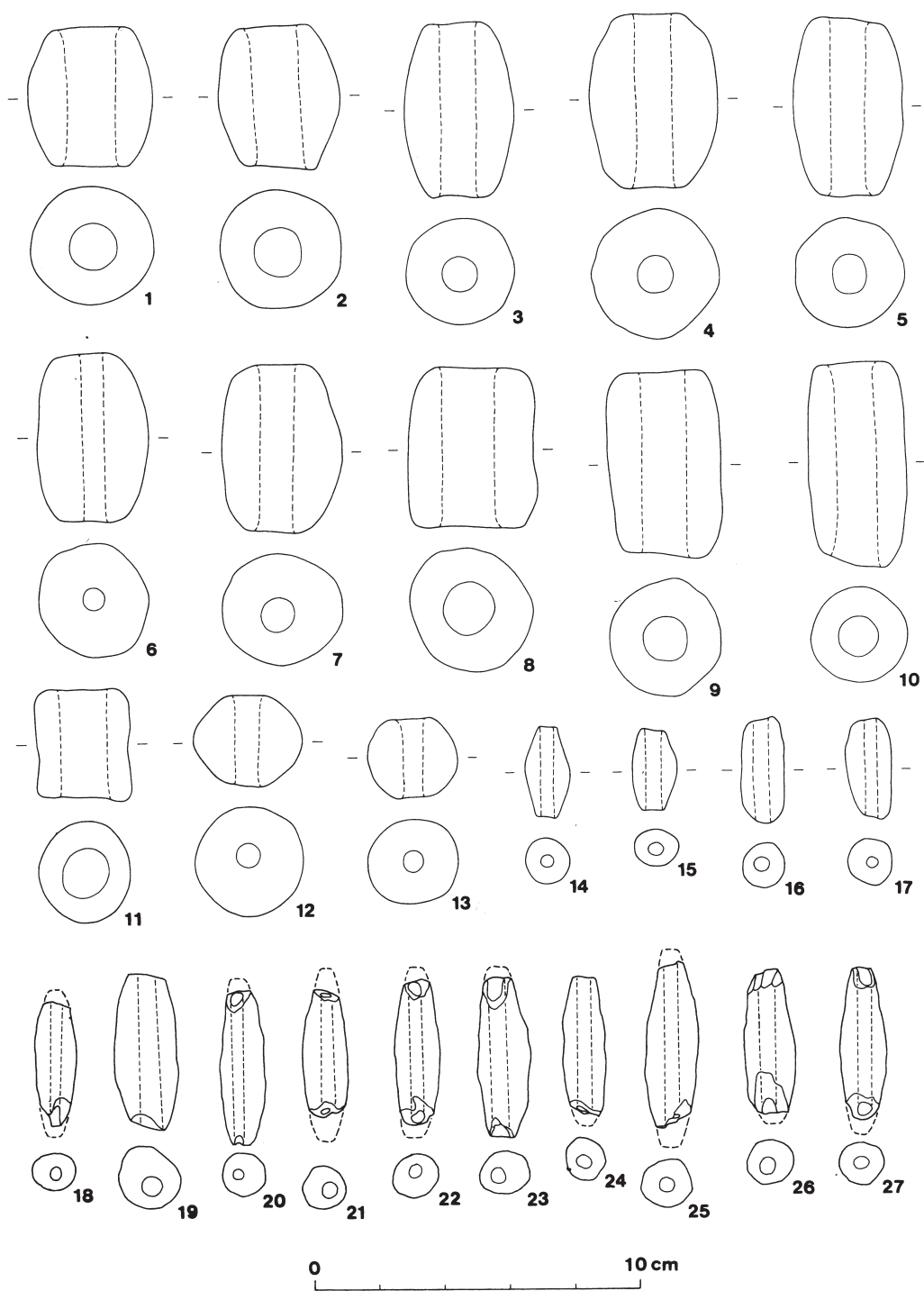


図7 管状土錘実測図5 (1~17: 無量寺遺跡、18~27: 湯屋窯跡、縮尺1:2)

## (2) 管状土錘の時間的分布

出土遺跡は珠洲市第3号窯跡、湯屋窯跡、戸津窯跡群のような窯跡と他の60遺跡のような集落遺跡にわけられるが、管状土錘の製作はむずかしいものではないので、集落遺跡では管状土錘は自給自足的に製作、消費されたと考えている。各集落遺跡での管状土錘の出土状態は、遺物包含層中から各時代、各時期の土器と混在して出土することがほとんどであり、時代や時期の決定が困難な場合が多い。そこで、それらが比較的確な遺跡から出土している資料をとりあげて検討する。

### 1) 奈良時代～平安時代

道下元町・高田・深江・畝田無量寺・黒田町・横江庄・三浦・上林・勅使の9遺跡117点についてみると、不明の51点をのぞいて形態の判明している66点の内訳は、Ⅰa類1点(1.5%)、Ⅰb類22点(33.3%)、Ⅰc類25点(37.9%)、Ⅰd類12点(18.2%)、Ⅱa類1点(1.5%)、Ⅲb類1点(1.5%)、Ⅲc類3点(4.5%)、Ⅲd類1点(1.5%)である。Ⅰ類が60点で全体の91.0%と大部分をしめ、Ⅲ類はわずか5点にすぎない。奈良～平安時代にかけての管状土錘では紡錘形になるⅠ類のものがほとんどで、わずかながら円筒形になるⅢ類がみられるという状況である。長さとの幅の関係においてはb・c類がほぼ同じ割合であり、長さが幅の1.3～2.9倍になるものが多いという傾向にある。

### 2) 弥生時代～古墳時代前期

奥原・国分高井山・倉垣・近岡・無量寺B・西念南新保・新保本町西・御経塚・敷地町後方の9遺跡47点についてみると、その形態の内訳はⅠc類1点(2.1%)、Ⅱa類3点(6.4%)、Ⅱb類1点(2.1%)、Ⅲa類7点(14.9%)、Ⅲb類1点(2.1%)、Ⅳa類29点(61.7%)、Ⅳb類3点(6.4%)、不明2点(4.3%)であり、Ⅳ類が32点で全体の68.1%をしめ、ついでⅢ類が8点で17.0%をしめている。長さとの幅の関係でみると、a類が39点と最も多くて全体の8割以上となっており、b類は5点でほぼ1割である。

63遺跡から出土した管状土錘660点のなかで、Ⅲa類は18点、Ⅲb類は21点、Ⅳa類は37点、Ⅳb類は4点であり、当該期の管状土錘がそれぞれの形態のなかでしめる割合はⅢa類38.9%、Ⅲb類4.8%、Ⅳa類78.4%、Ⅳb類75.0%となっている。これらのことから弥生時代終末～古墳時代前期の管状土錘ではⅣ類の球状を呈するものが大多数をしめ、長さとの幅の関係においては両者がほぼ等しい長さのものが多くという傾向にある。そしてさらにいえば、Ⅳ類と分類した球状になる管状土錘は当該期においてのみ特徴的なものであるといえる。

## (3) 管状土錘の重量

漁網の存在は浮子、網、沈子などのうち沈子としての漁網錘からしられ、網自体の検出はほとんど皆無に等しい。このような状況のもとで漁網についてしるには、錘具の重量の具体的数値化が必要であり、本地域の管状土錘の重量は表1のとおりである。

表1では21遺跡334点について集計したが、334点のうち完形品は210点、完形時の重量を推定した欠損品が124点である。完形品にかぎって管状土錘の重量分布の傾向をみてみると、60g

表1 管状土錘重量分布表(上段:完形品の点数、下段:括弧内は完形時の重量を推定した欠損品の点数)

番号	遺 跡 名	0.1 10.0	10.1 20.0	20.1 30.0	30.1 40.0	40.1 50.0	50.1 60.0	60.1 70.0	70.1 80.0	80.1 90.0	90.1 100.0	100.1 110.0	110.1 120.0	120.1 130.0	130.1 140.0	140.1 150.0	150.1 200.0	200.1 250.0	250.1 300.0	計
3	美麻奈比古神社前遺跡		2		1				1											4
5	縄手遺跡	5		3	7															15
6	道下元町遺跡	4 (2)			3		1	2	1 (1)	(1)	(1)						1			12 (5)
10	奥原遺跡			4	1 (1)			1	1											7 (1)
15	米浜遺跡	19 (1)		1	(1)	2 (1)	3 (5)	2 (2)	1 (5)	4 (2)	6 (1)	4	1 (2)		1 (1)			1		45 (21)
20	寺家チョウエイジ遺跡		2 (1)	5	2 (2)	3	4				(1)						1			17 (4)
21	寺家オオバタケ遺跡		1	2	2															5
22	寺家ブダイ遺跡		2										(1)							2 (1)
25	深江遺跡	1 (1)	2 (1)	2	3 (2)	5 (3)	1 (4)	(1)		(2)	1	1 (1)	2	1	1					20 (15)
27	上田出西山遺跡	1			(1)	1 (1)	2 (4)	2 (2)	1 (4)	(2)	1 (1)	2 (2)	(1)	1 (1)	(1)		(2)			11 (22)
28	今町A遺跡	3			1				(1)	1										5 (1)
31	近岡遺跡			2	1		(1)	2 (2)	(2)	1										6 (5)
33	無量寺遺跡	9 (8)	3	2	(2)	4 (5)	5 (3)	1 (2)	1	1 (1)										26 (21)
35	桂遺跡	(2)	1 (3)	3 (1)	1 (3)	1 (2)	(1)										(1)			6 (13)
36	畝田・寺中遺跡	4 (2)		(1)			1													5 (3)
46	宮永遺跡			1																1
48	徳光ヨノキヤマ遺跡	1	3	1	4	1														10
57	田尻シンペイダゲン遺跡			3		1														4
58	敷地町後方遺跡					2		1												3
A	法住寺第3号窯		1				2		1			1		1						6
B	湯屋窯跡	(10)	(2)																	(12)
計		47 (26)	17 (7)	29 (2)	26 (12)	20 (12)	19 (18)	11 (8)	7 (12)	7 (8)	8 (6)	8 (3)	3 (4)	3 (1)	2 (2)		1 (3)	1	1	210 (124)
%		22.4 (21.0)	8.1 (5.6)	13.8 (1.6)	12.4 (9.7)	9.5 (9.7)	9.0 (14.5)	5.2 (6.5)	3.3 (9.7)	3.3 (6.5)	3.8 (4.8)	3.8 (2.4)	1.4 (3.2)	1.4 (0.8)	1.0 (1.6)		0.5 (2.4)	0.5	0.5	99.9 (100.0)

を境に重くなるにつれて数量が少なくなっており、110gをこえるものは極端に少なくなっている。また、100gをこえる管状土錘が出土している遺跡としては、米浜遺跡(図4の1~4・10・12~14)、上田出西山遺跡(図5の1~5)、寺家チョウエイジ遺跡(図5の6)、深江遺跡(図5の11)、勅使遺跡(図5の13)、法住寺第3号窯(図6の16・17)などをあげることができる。これらの遺跡の時期などから100gをこえる管状土錘が出現するのは、确实なところ平安時代以降と推測される。10g以下の管状土錘の数量も多く、全体の割合では約20%をしめている。19点出土している米浜遺跡(図3の16~25)では形態的にはIc類8点、Id類11点である。9点の無量寺遺跡(図7の14~17)ではIb類4点、Ic類とId類が各1点、IIIc類3点であり、最軽量のものには細長い形態のものが多。



弥生～古墳前期の奥原・近岡・敷地町後方の3遺跡16点についてみると、20.1～80.0gに分布する。また、これら16点の平均重量は46.0gであり、欠損品で完形時の重量を推定したもの6点をくわえた場合の平均重量は52.8gである。

#### 4. 縄文時代の漁網錘

漁網錘として確実視される土器片錘、切目石錘、有溝石錘をとりあげ、拙著をもとに検討をくわえていく（山本 1983）。1983年3月時点で、筆者が石川県南部の加賀地方で確認した資料は12遺跡204点である（図8）。

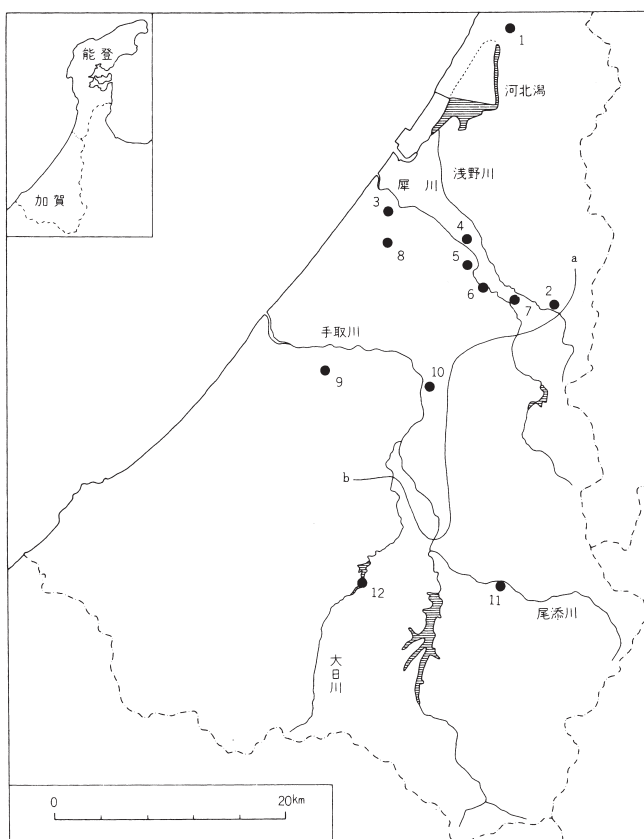


図8 土器片錘・切目石錘・有溝石錘出土遺跡分布図

#### (1) 土器片錘・切目石錘・有溝石錘の形態分類

##### 1) 土器片錘

土器片を利用して周囲を打ち欠いたり、磨いたりして整形した錘具である。3遺跡から3点出土しており、いずれもその長軸の両端に切りこみを有するものである（図9の1）。

## 2) 切目石錘

扁平な楕円礫を素材とし、切りこみを施した錘具である。擦り切りによる切りこみの個所によって以下の3類に形態分類している。

A類：扁平な楕円礫の長軸の両端あるいは一端に切りこみがあるもの。

B類：扁平な楕円礫の長軸・短軸両方の両端または一端に切りこみがあるもの。

C類：扁平な楕円礫の短軸の両端あるいは一端に切りこみがあるもの。

11遺跡から194点出土しており、遺跡数、点数ともに全体の90%以上であり、本地域の漁網錘のなかで最も重要な位置をしめている。種別ではA類が10遺跡から193点出土しており、圧倒的多数をしめている(図9の2~9・11・12, 15~21, 図10・11)。そのうち167点が笠舞遺跡から発掘、表採されており、A類全体の86.5%をしめている。C類は天池遺跡の1点のみである(図9の10)。

## 3) 有溝石錘

御経塚遺跡からわずかに3点出土しているだけである。扁平な楕円礫の長軸を一周するもののみであり(図9の13・14)、形態的には切目石錘A類と関連が深い。

## (2) 土器片錘・切目石錘・有溝石錘の時間的分布

### 1) 土器片錘

北塚遺跡からの出土点数が多く、中期後葉に出現している。

### 2) 切目石錘

中期後葉に出現し、遺跡数と点数は減少しながらも後晩期まで連続している。

### 3) 有溝石錘

御経塚遺跡からわずかに3点出土しているだけであり、後期中葉から晩期に属し、細かな時期は不詳である。

## (3) 土器片錘・切目石錘・有溝石錘の重量

加賀地方の漁網錘の重量については以下に述べるとおりである。

### 1) 土器片錘

上山田貝塚の1点は32.3g(平口・高堀・小島ほか 1979)、北塚遺跡の1点は2.9g(南ほか 1977)、尾添遺跡の1点は26.6gであり(平田・木越 1977)、平均20.6gである。未発表資料であるが、四柳嘉章氏のご教示によれば、1972年に石川県教育委員会文化室が北塚遺跡の発掘調査をおこなっており、1982年11月現在で約30点の土器片錘が確認されているという。それらの重量は20~50gに集中し、平均35gであるという。

### 2) 切目石錘

切目石錘の重量について表したのが表2である。

まず、笠舞遺跡167点のうち完形品137点を測定したが、これらのなかには切目が擦り切りによる一般的なものの121点(図9の15~21、図10の3~6、図11の3~5)、切目の一端が擦り切りで他端が敲打によるもの2点(図11の1・2)、両端あるいは一端を敲打した後に擦り切りで切目を

表2 切目石錘重量分布表（遺跡番号は図8と一致する）

遺跡番号 重量 (g)	4		2・3・6 8・9・11	計	
0～9.9	1	0.7%		1	0.7%
10.0～19.9	19	13.9	2	21	14.3
20.0～29.9	15	10.9	1	16	10.9
30.0～39.9	32	23.4	1	33	22.4
40.0～49.9	11	8.0	1	12	8.2
50.0～59.9	16	11.7	1	17	11.6
60.0～69.9	11	8.0	3	14	9.5
70.0～79.9	10	7.3		10	6.8
80.0～89.9	8	5.8		8	5.4
90.0～99.9	2	1.5		2	1.4
100.0～109.9	2	1.5	1	3	2.0
110.0～119.9	1	0.7		1	0.7
120.0～129.9	1	0.7		1	0.7
130.0～139.9	2	1.5		2	1.4
140.0～149.9	2	1.5		2	1.4
150.0～159.9	1	0.7		1	0.7
160.0～169.9					
170.0～179.9	1	0.7		1	0.7
⋮					
240.0～249.9	1	0.7		1	0.7
250.0～259.9	1	0.7		1	0.7
計	137	99.9	10	147	100.2

製作して敲打痕がのこっているものが14点みられる（図11の6～17）。なお、表面や側面がみがかれているものがあり（図10の11～16、図11の6・9）、正面図において破線でその範囲をしめし、側面にみられる部分には実線を付してあらわしている。最軽値7.6g、最重値254.9g（図10の18）で、一般的な切目石錘の完形品121点の平均重量は47.3g、敲打痕のあるものをふくめた完形品137点の平均重量は53.4gである。

これらに東町・北塚・天池・御経塚・下開発茶臼山古墳群・尾添の6遺跡10点の測定値をくわえ、7遺跡147点についてみると、7.6～254.9gに分布するものの10g以下や90g以上は極端に少なくなっており、30g台が最も多くて全体の22.4%をしめ、10～60g台で全体の約77%をしめている。そして一般的なもの完形品131点の平均重量は47.3gであり、敲打痕のあるものをふくめた完形品147点の平均重量は53.0gである。

### 3) 有溝石錘

御経塚遺跡から出土した3点は完形品1点、欠損品が2点である（山本・高堀ほか 1983）。前者は66.6g（図9の13）、後者は欠損した状態で44.6g（図9の14）と22.5gである。

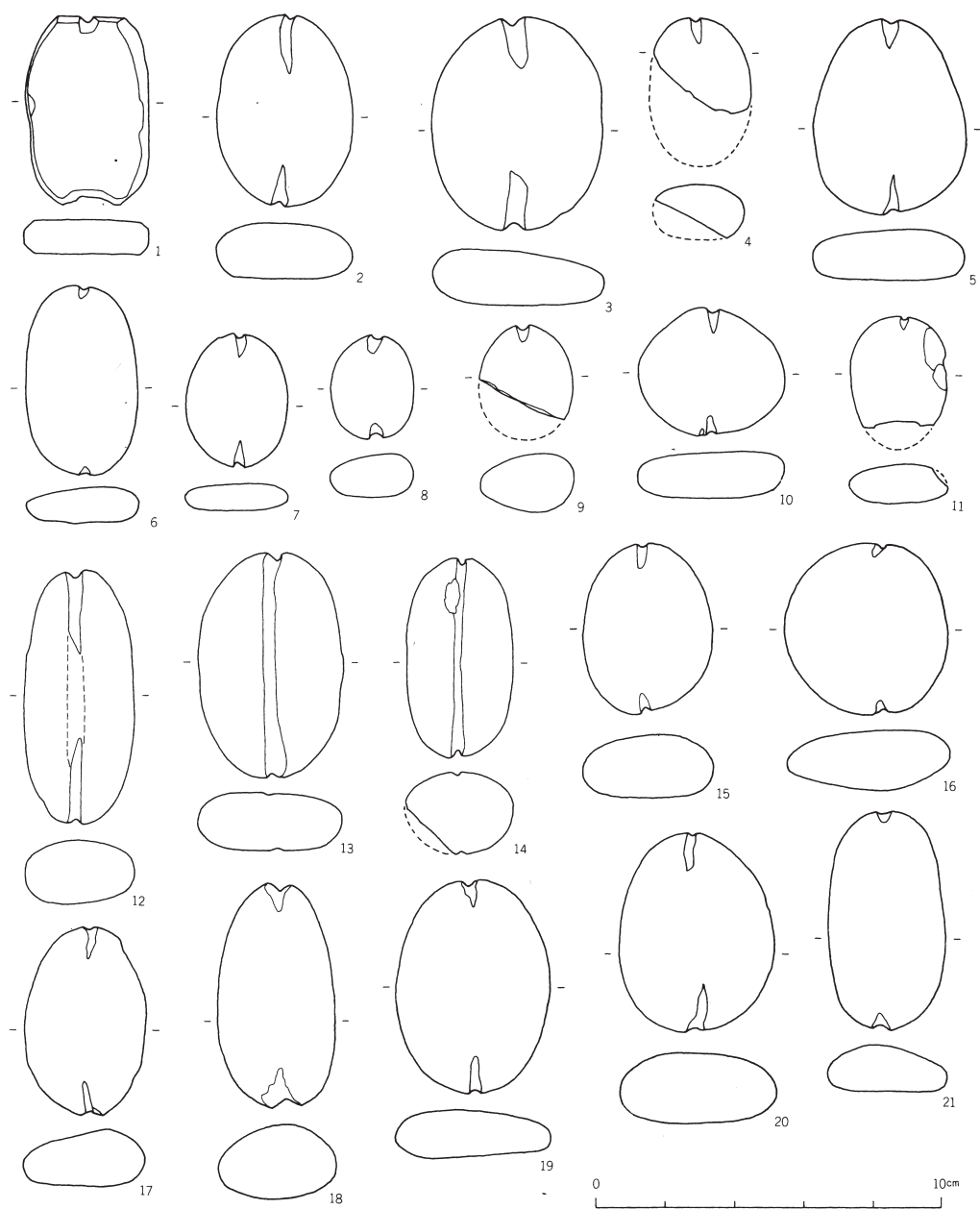


図9 土器片錘・切目石錘・有溝石錘実測図 (1・2: 尾添遺跡、3: 東遺跡、4~8: 北塚遺跡、9: 中平遺跡、10: 天池遺跡、11: 瀬領遺跡、12~14: 御経塚遺跡、15~21: 笠舞A遺跡、縮尺1:2)

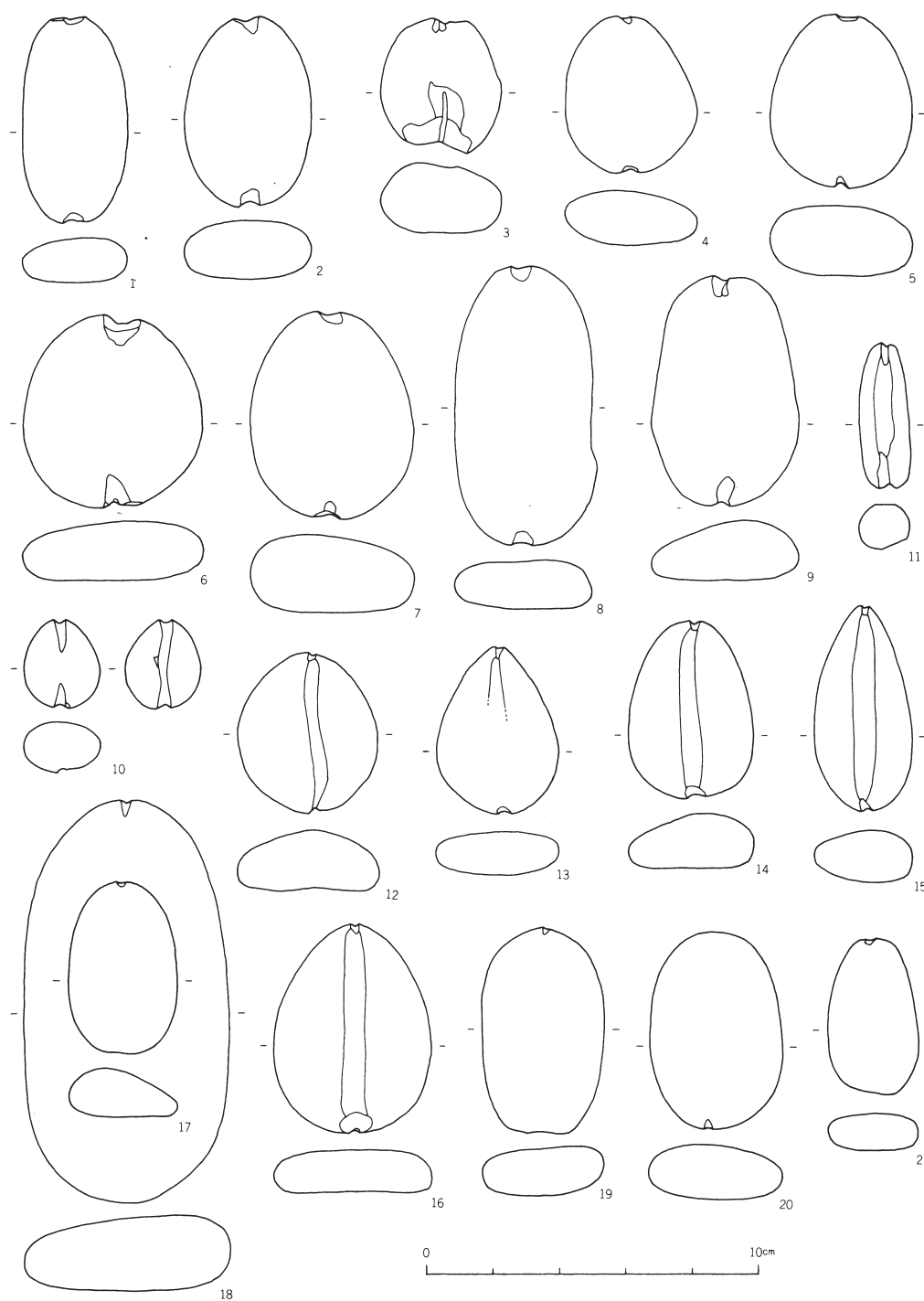


図10 切目石錘実測図1（笠舞A遺跡、縮尺1：2）

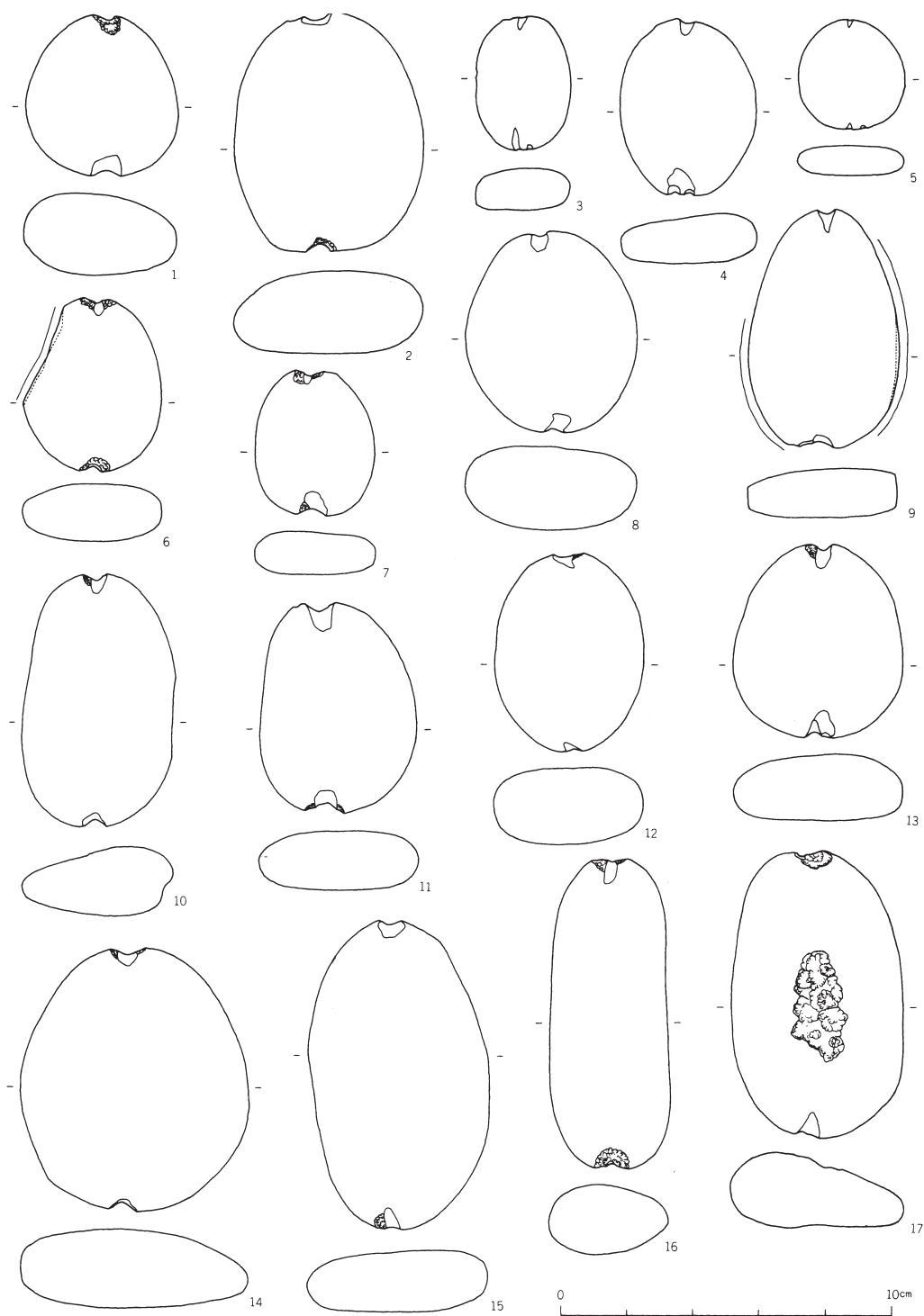


図11 切目石錘実測図2 (笠舞A遺跡、縮尺1:2)



## 5. 漁網錘の重量と編物石の重量

### (1) 民具資料・文献資料・考古資料における漁網錘の重量

民具資料では、石錘は10～23g、管状土錘が15～20gである。

文献資料の『石川県湖潟内湾水面利用調査報告』では、1匁 (3.75g)、2匁 (7.5g)、4匁 (15.50g)、5匁 (18.75g)、6匁 (22.5g)、7匁 (26.25g)、7.5匁 (28.125g)、8.5匁 (31.875g)、20匁 (75.0g) の重量のものがあり、大体1匁 (3.75g)～8匁 (31.875g) に分布し、20匁 (75.0g) だけがかけはなれて重くなっている。

考古資料についてみていくと、管状土錘は10g以下のものも多く、全体の割合では約20%をしめている。60gを境に重くなるにつれて数量が少なくなっており、110gをこえるものは極端に少なくなるという傾向がみとめられる。100gをこえる管状土錘が出現するのは、确实なところ平安時代以降である。弥生～古墳前期のものは20.1～80.0gに分布し、平均重量は46.0gである。縄文時代の土器片錘・切目石錘・有溝石錘の重量では30g台がもっとも多く、10～90gで全体の90%をしめ、平均重量は約47gである。

考古資料、文献資料、民具資料を通観すると、漁網錘では3g前後から90gまでが多く、110gをこえるものはきわめて少なくなる。

### (2) 民具資料の編物石の重量

編物石に関する十分な民俗調査を筆者はおこなっていないので、渡辺誠氏の民俗学的研究の成果を引用する。渡辺誠氏は錘具をもちいるもじり編みの対象製品を4類に分類し、製品群と石錘の重量の関係をあきらかにしている (渡辺 1981)。それによれば、第1群の製品はハバキで、石錘の重量は20～80gである。第2群の代表的な製品は間隔の広いハバキ、腰カゴ、背おいカゴで、ほかに紙漉きス、各種のスノコなどがあり、石錘の重量は80～180gである。第3群の製品は米俵、炭俵、ムシロ、各種のコモ、ミノ、ウエなどで、石錘の重量は160～300gである。第4群の製品は雪囲いズやエリズなどの大型品で、石錘の重量は360～880gである。

## 6. 打欠石錘の形態分類と重量

打欠石錘を多数出土している11遺跡をとりあげ、検討をくわえていく。石川県の縄文時代の主要な集落遺跡は海岸部、潟湖周辺、河川流域に立地している。そこで、能登半島の海岸部の遺跡としては、入り江奥の沖積低地上や入り江をのぞむ台地上にある能登町真脇遺跡、穴水町甲・小寺遺跡、七尾市通ジゾバナ遺跡、七尾市三引遺跡をとりあげる。潟湖をのぞむ台地上に立地する遺跡としては、七尾市赤浦遺跡、かほく市上山田貝塚、小松市念仏林遺跡をとりあげる。河川流域の遺跡としては、金沢市内を貫流する犀川流域および浅ノ川流域にある笠舞A遺跡、東市ノ瀬遺跡、北塚遺跡をとりあげる。くわえて現在の手取川流域に位置する蒔生遺跡もとりあげる。

## (1) 打欠石錘の形態分類

打ち欠き部の個所によって以下の3類に形態分類できる。

A類：扁平な楕円礫の長軸の両端あるいは一端に打ち欠きがあるもの。

B類：扁平な楕円礫の長軸・短軸両方の両端または一端に打ち欠きがあるもの。

C類：扁平な楕円礫の短軸の両端あるいは一端に打ち欠きがあるもの。

いずれの遺跡でもA類が主体で、B類とC類は少数である。また、なかには長径と短径がほぼ等しく、A類とC類の区分にまよう場合もある。

## (2) 打欠石錘の重量

### 1) 海岸部

#### ①能登町真脇遺跡

入江の奥の沖積低地上に立地し、北・東・西の三方は山にかこまれ、南には海がひろがっている。標高は6～12mである。早期末～前期初頭の佐波式から晩期末の長竹式までの土器型式が連続して継続している遺跡である。

総数239点出土している(山本・高堀ほか 1986)。観察表にしるされた重量では20.9～1654.1gの範囲に分布し、全体の約70%が101～400gに集中している(図12)。

#### ②穴水町甲・小寺遺跡

入江に面した標高6～10mの海岸段丘上に立地し、時期は前期初頭である。

調査で出土したものに表面採集品をくわえると総数700点以上にのぼり、そのうちの433点の重量が計測されており、50gきざみで点数が報告されている(高瀬・四柳・長谷ほか 1972)。それによれば1～1250gに分布し、50～300gがもっとも多い。301～500gは減少するが、それぞれ10～30点みられ、600gをこえとごくわずかしみられなくなる。

#### ③七尾市通ジゾバナ遺跡

七尾湾にうかぶ能登島の西端に位置し、能登半島との海峡部になる三ヶ口瀬戸に突出する丘陵上に立地している。

88点出土している(安・山本ほか 1997)。そのほとんどが前期に属すると考えられており、なかには後期に属する可能性もあるが、出土状況や形態からは後期とは特定できないとされている。重量は26.9～897.0gで、40～120gが多いと報告されている。

#### ④七尾市三引遺跡

入江の奥の沖積低地から丘陵上に貝塚や低湿地型貯蔵穴が形成されており、標高は約3mである。北・西・南の三方は山にかこまれ、東側には七尾湾がひろがっている。早期末～前期初頭の佐波式のあとしばらく空白期間があり、中期の新崎式から晩期の下野式まであまり間断なく土器型式が連続しているが、出土量は佐波式が圧倒的多数をしめている。

4000点以上出土していると報告されているが、報告書に観察表や実測図が掲載されているものは61点で、出土数全体の1.5%程度にしかすぎない(金山・小嶋ほか 2004)。これらの61点に

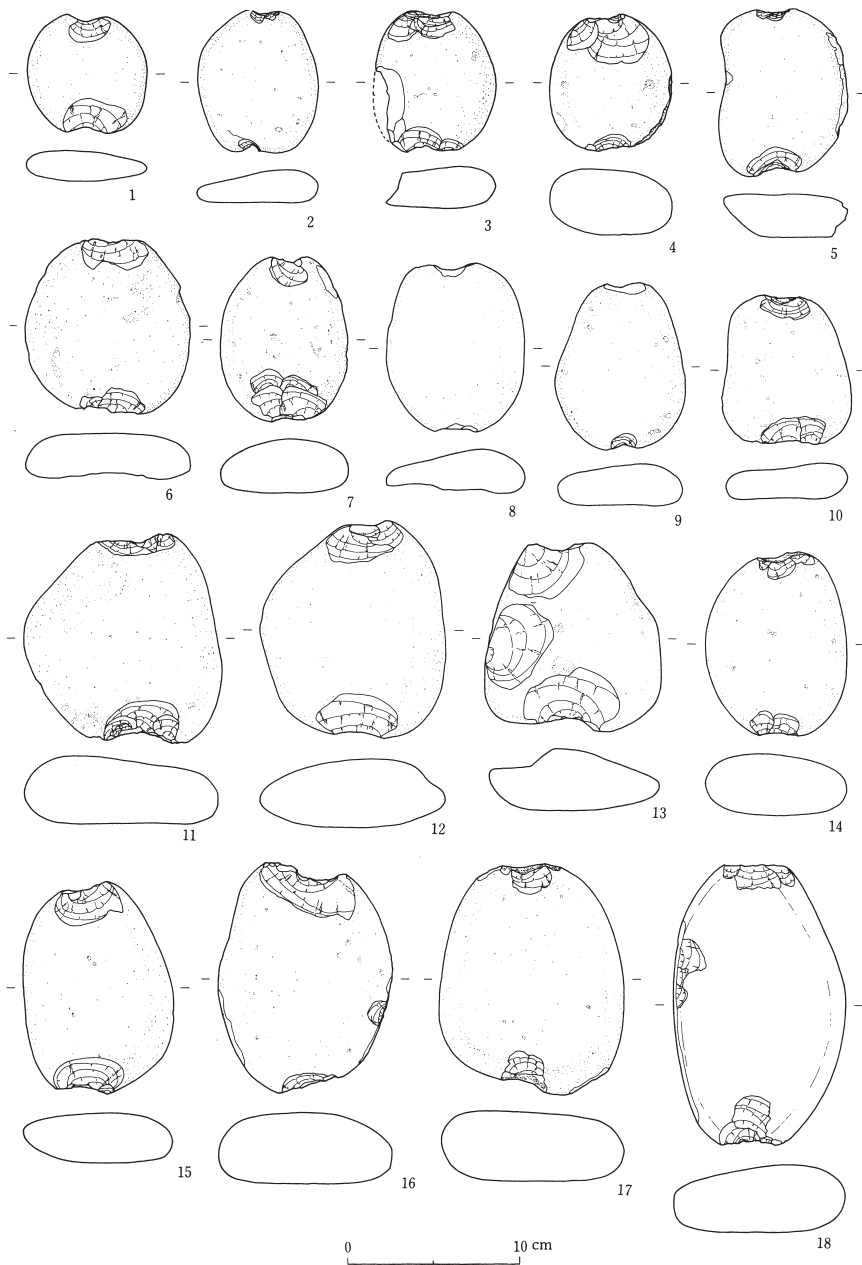


図12 打欠石錘実測図（真脇遺跡、縮尺1：4）

ついて重量をみていくと、53.6～846.5gに分布する。53.6～333.5gに点数は少ないながらも万遍なく分布し、この範囲に61点中の53点がふくまれ、全体の86.9%となる。なお、縄文土器の出土量から判断して4000点の大半が佐波式期の所産であると考えている。

## 2) 潟湖周辺

### ①七尾市赤浦遺跡

赤浦潟をのぞむ標高30mの舌状台地上に立地し、中期前葉後半から後期前葉後半の集落遺跡で、貝塚をともなっている。

わずか16点が表面採集されているにすぎない(唐川・四柳ほか 1977)。重量は35～260gに分布し、60～150gにやや集中する。180gをこえると散発的にみられる程度である。

### ②かほく市上山田貝塚

河北潟をのぞむ台地の斜面に形成されている。前期末から中期の縄文土器が出土しており、中期前葉後半から中葉が主体である。

第1次調査で6点、第2次調査で11点、合計17点出土している(平口・高堀・小島ほか 1979)。14.0gから813.3gまで大小さまざまであるが、60～140gが半数をしめている。

### ③小松市念仏林遺跡

木場潟・今江潟・柴山潟の加賀三湖にかこまれた台地上に立地する。中期前葉から中葉にかけての集落遺跡である。

総数237点出土しているほかに、素材となる扁平礫も146点出土している(檜田・望月ほか 1988)。重量は11.9～293.6gの間に分布し、60～100gが多く、ついで30～50gと110～130gとなり、150gをこえると点数は少なくなる。

## 3) 河川流域

### ①金沢市東市瀬遺跡

浅野川とその支流の岩谷川にはさまれた河岸段丘上に立地し、標高は108mである。中期中葉から後期初頭まで継続した集落遺跡である。

完形品が138点出土している(増山・南ほか 1985)。重量は24.5～343gに分布し、10gごとにみた点数の分布は60・70g台および110g台の二つの頂点があり、160gより重くなると極端に少なくなつて数点ずつとなる。

### ②金沢市笠舞A遺跡

犀川流域の河岸段丘状に立地する集落遺跡で、前期中葉から後期前葉までの土器が出土しており、そのなかでも中期後葉を主体としている。

第2・3次調査では1116点出土しており(上田・南ほか 1981)、完形品1001点、欠損品は115点である。もっとも軽いものは8g、もっとも重いものは870gで、30～90gが全体の7割弱をしめている。150～170gをこえると点数は減少して数点ずつになり、それが550gまでつづいている。

### ③金沢市北塚遺跡

犀川と伏見川、十人川が合流する地点に位置し、これらが形成した自然堤防に立地し、標高は約5mである。中期中葉から後期初頭の集落遺跡で、中期後葉を主体とする。

第14次調査では28点出土している（谷口ほか 1998）。観察表に記載されている23点から重量をみていくと、70～300gに分布し、78.3%が70～180gの間にはいり、200g台は4点である。

第15次調査では63点出土している（浅野・沢田ほか 1999）。観察表に記載されている30点から重量をみていくと、20.5～191.9gに分布し、100.1～110.0gが8点とやや多いが、全体に万遍なくひろがっている。

第14次と第15次をあわせると、20.5～300gに分布し、40～160gが77.4%をしめている。

### ④能美市蒔生遺跡

能美丘陵のほぼ中央に位置する舌状台地上に立地し、この舌状台地はその北側にひろがる手取川扇状地にとびだす形になっている。中期中葉から中期後葉の集落遺跡で、中葉の古府式期を主体としている。

総数1032点をかぞえ、重量は8.9gから297gまでである（西野 1978）。10g単位に分類された表が作成されている。それによると、30～69gが52.2%と半数をしめており、20～99gでは85.4%となり、120gをこえると点数はそれぞれ10点未満となる。

## 4) ま と め

能登半島の海岸部の遺跡でみられる打欠石錘の重量は21～1654gに分布し、真脇・甲小寺・三引の3遺跡では50～300gあるいは100～400gが多い傾向にある。それに対して通ジゾハナ遺跡だけは40～120gと軽量のものが多くなっている。

潟湖周辺の赤浦・上山田・念仏林の3遺跡では打欠石錘の重量は12～813gに分布し、60～140gのものが多くなっている。

河川流域の4遺跡では打欠石錘の重量は8～870gに分布する。犀川・浅野川流域の東市瀬・笠舞A・北塚の3遺跡では遺跡によって若干差があるものの、40～110gのものが多く、160gをこえると点数が少なくなっている。それに対して蒔生遺跡では20～100gの軽量のものが多く、120gをこえるものが少なくなる傾向にある。

## おわりに

さきに考古資料や文献資料、民具資料の検討をととして漁網錘の重量と編物石の重量を明示してきた。ここでは、それらの重量と打欠石錘の重量を比較し、8gから1654gまでと重量幅のひろい打欠石錘の用途を推定していく。

考古資料や文献資料、民具資料では、漁網錘では3g前後から90gまでが多く、110gをこえるものはきわめて少なくなるので、8g～110gの打欠石錘は漁網錘になる可能性がある。また、渡

辺誠氏の指摘する第1群製品の石錘の重量は20～80g、第2群製品の石錘の重量は80～180gであることから、これらは第1群製品の編物石および第2群製品の編物石の一部になる可能性もある。110gをこえて880gまでの打欠石錘は第2～4群製品の編物石になる可能性がある。880gをこえる打欠石錘については、漁網錘や編物石にならず、べつの用途であった可能性が推測されてくる。また、880g以下の打欠石錘についてもべつの用途があった可能性も否定できない。

高堀勝喜氏と平口哲夫氏は、上山田貝塚の「遺物から推定された漁法として、骨製ヤスによる刺突漁法、礫石錘を用いた網漁法、それに弓矢による漁法がある」(平口・高堀・小島ほか 1979: 167)と指摘し、それにつづけて「しかし、潟漁の民俗例を参考にするならば、縄文時代の内水面漁撈において実際に重きをなしたのは、ヤナ、ウケ、エリといった陷穽具や、カゴ・網をつけた搔具など、かえって遺物として残りにくい漁法が威力を発揮したのではあるまいか」と指摘している。筆者も基本的には指摘の後者のように考えており、そうした漁法のほかに『石川縣湖潟内彎水面利用調査報告』(石川縣水産試験場 1912ab・1913ab)を根拠として柴漬け漁や箱漬け、タモ網、手づかみなどの漁法がおこなわれていたことも想定している。これは河北潟にとどまらず、今江潟・木場潟・柴山潟の加賀三湖や邑知潟でも同様であったと考えている。つぎの段階として、ウケやエリ簀はどのような技術で製作されたのか、ということが問題となってくる。それらは錘具をもちいたもじり編みで製作されるし、カゴも錘具をもちいたもじり編みで製作でき、その錘具に自然石とともに打欠石錘をあてることも可能である。陷穽漁は潟湖ばかりでなく、能登半島の小さな入り江や加賀地方の河川流域においてもさかんにおこなわれた、と推測している。

今後へのこされた課題としては、以下の点を指摘しておきたい。

まず、漁網錘説を採用した場合、第一に十分な根拠をしめして具体的な網漁法をしめすことが必要になってくる。第二に、縄文時代後晩期から弥生時代にかけて打欠石錘はほとんど出土しなくなるが、一網打尽にできて効率的な打欠石錘をつかった網漁がその時期になぜおこなわれなくなるのか、ということを説明する必要がある。第三に、石川県内では中期前葉から晩期までもじり編みによる編物の底部圧痕がみられるが、それらの錘具となる遺物は何で、それが遺跡からどのような出土状況をしめしているのか、ということを明示する必要がある。このような課題のほかに、打欠石錘を漁網錘としてつかうことができるという実験考古学の成果を根拠にする研究者は、それをみとめた場合、自然石がもじり編みの錘具としてつかうことができればそれに簡略な打ち欠きをほどこした打欠石錘ももじり編みの錘具としてもつかえるので、民俗例という長い年月をかけて蓄積されてきた実験の成果から編物石の用途も同時にみとめなければならないことを理解する必要がある。

つぎに、編物石説をとる研究者では、遺跡によっては打欠石錘を大量に出土する場合があります、なぜ大量に出土するのか、その理由を説明する必要がある。編物石はそれほど消耗せず、長期間使用できる石器なので、とくにそれを主導する渡辺誠氏は納得のいく解釈をしめす必要がある。

1912年・1913年に発刊された『石川縣湖潟内彎水面利用調査報告』はコピーをすると本がい



たむので、1989年5月から秋にかけて毎週のように土曜日に石川県立図書館にでかけ、かきうつして利用した。また、拙稿の発行年が1983年と1986年であることや、輪島市立民俗資料館や珠洲市仁江漁港での民俗調査を1989年におこなっていることからわかるように、本研究は1980年代にすすめていたものである。資料調査をすすめ、仮説を検証していく過程で、結論としては本稿でしめしたところまでしか論究できないという目途がたったため、20年以上放置したままになっていた。しかし、冒頭でしめたように、手取川扇状地における縄文時代後晩期社会の基本的性格を解明するために打欠石錘の用途について言及する必要がでてきて執筆したものである。なお、ここ20年あまりの間に考古資料は増加して情報の量がふえたものの、研究の水準と傾向そのものに特段の変化はない。

### 引用文献

- 浅野豊子・沢田まさ子ほか、1999、『金沢市北塚遺跡・北塚古墳群』、(財)石川県埋蔵文化財センター：金沢。
- 石川県水産試験場、1912a、『石川県湖潟内彎水面利用調査報告』、第1巻（今江、木場潟之部）、石川県鳳至郡能都町。
- 石川県水産試験場、1912b、『石川県湖潟内彎水面利用調査報告』、第2巻（邑知潟之部）、石川県鳳至郡能都町。
- 石川県水産試験場、1913a、『石川県湖潟内彎水面利用調査報告』、第3巻（柴山潟之部）、石川県鳳至郡能都町。
- 石川県水産試験場、1913b、『石川県湖潟内彎水面利用調査報告』、第4巻（河北潟之部）、石川県鳳至郡能都町。
- 上田亮子・南 久和ほか、1981、『金沢市笠舞遺跡』金沢市文化財紀要29、金沢市教育委員会：金沢。
- 檜田 誠・望月精司ほか、1988、『念仏林遺跡』、小松市教育委員会：小松。
- 金山哲哉・小嶋芳孝ほか、2004、『田鶴浜町 三引遺跡Ⅲ（下層編）』、石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター：金沢。
- 唐川明史・四柳嘉章ほか、1977、『赤浦遺跡』、七尾市教育委員会：七尾。
- 高瀬 澄・四柳嘉章・長谷 進ほか、1972、『甲・小寺遺跡』穴水町文化財叢書第5輯、穴水町文化財保護専門委員会：石川県穴水町。
- 谷口宗治ほか、1998、『金沢市北塚遺跡』金沢市文化財紀要139、金沢市埋蔵文化財センター：金沢。
- 西野秀和、1978、『蒔生遺跡』、辰口町教育委員会：石川県辰口町。
- 平口哲夫・高堀勝喜・小島俊彰ほか、1979、『上山田貝塚』、宇ノ気町教育委員会：石川県宇ノ気町。
- 平田天秋・木越隆三、1977、『尾口村尾添遺跡発掘調査報告』、石川県教育委員会：金沢。
- 増山 仁・南 久和ほか、1985、『金沢市東市瀬遺跡』金沢市文化財紀要50、金沢市教育委員会：金沢。
- 南 久和ほか、1977、『金沢市北塚遺跡』金沢市文化財紀要14、金沢市教育委員会：金沢。
- 安 英樹・山本直人ほか、1997、『能登島町通ジソハナ遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 山本直人、1983、『加賀における縄文時代の網漁について』『北陸の考古学』（『石川考古学研究会々誌』第26号）、199～217頁、石川考古学研究会：金沢。
- 山本直人、1986、『石川県における古代中世の網漁業の展開』『石川考古学研究会々誌』第29号、107～126頁、石川考古学研究会：金沢。
- 山本直人・高堀勝喜ほか、1983、『野々市町御経塚遺跡』、野々市町教育委員会：石川県野々市町。
- 山本直人・高堀勝喜ほか、1986、『石川県能都町 真脇遺跡』、能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団：石川県能都町。
- 渡辺 誠、1981、『編み物用錘具としての自然石の研究』『名古屋大学文学部研究論集』LXXX（史学27）、1～46頁、名古屋。

**Abstract**

## On the Use of the Chipped Stone Weights in the Jomon Period

Naoto YAMAMOTO

In general, flat and elliptical stone weights, in which the ends of both the major and minor axes are chipped, are collectively referred to as “chipped stone weights”. There are two theories as to the use of chipped stone weights: one deems such weights to be fishing net sinkers; and, the other considers them to be loom weights used for weaving using a weaving board.

This paper aims to elucidate how such chipped stone weights were actually used in the Jomon Period in the district of present-day Ishikawa Prefecture. First, the paper will establish the weight of fishing net sinkers by reviewing: (i) data of net fishing-related folklore remaining of Ishikawa Prefecture; (ii) literary documents published in the early-modern era; and (iii) the archaeological remains ranging from the Jomon Period to the Middle Age. Next, the paper will establish the weight of loom weights used in the Jomon Period, based on the folklore data handed down to current times. Finally, the paper will establish the weights of the chipped stone weights used in the Jomon Period.

Through the comparisons and analysis described above, this paper aims to: (i) compare the weights of fishing net sinkers from the Jomon Period to the present day with the weights of chipped stone weights of the Jomon Period; (ii) compare the weights of loom weights established through folklore data with that of the chipped stone weights of the Jomon Period; and, thereby, (iii) conclude whether the chipped stone weights of the Jomon Period were used as fishing net sinkers or as loom weights.

According to the results of the research of the chipped stone weights unearthed from the 11 Jomon sites within Ishikawa Prefecture, it is understood that the weight of such weights ranges from 8 to 1,654 grams. Among these weights, those of 8 – 110 grams are likely to be fishing net sinkers. Furthermore, the weights ranging 20 – 880 grams may be loom weights, and those exceeding 880 grams may have been used for a different type of application from the fishing net sinkers or loom weights.